

# 歴史的分野指導計画表(第1・2学年)

\* 歴史的分野(1・2学年)の教科書での時数105時間のうち、学校の授業以外の場において行うことが考えられる教材・学習活動16時間

時	テーマ	授業づくりの視点	授業のねらい	学校の授業以外の場において行うことが考えられる教材・学習活動
1	歴史と出会う pp.4-5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・6月23日、沖縄の人びとが追悼の行事に参加し、平和の礎で、刻まれた名前を指でなぞり、あるいは魂魂の塔で献花する。そういう行為によって、戦火のなか、亡くなった人びとの姿を思い浮かべ、戦場となった悲惨に改めて思いをはせる。</li> <li>・以上のような「歴史への案内」で(本文記述と図版を「案内役」として)、生徒が「出会う」歴史とは、沖縄の人びとの心に刻まれた沖縄戦の様相であり、今の沖縄の人びとの「こころ」である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・6月23日の沖縄の人びとの姿に接しながら、戦場で失われた家族への、人びとの思いを想像する。</li> </ul>	
2	歴史を楽しく学ぼう pp.6-9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校の歴史学習をふり返り、中学校の歴史学習との違いに気づき、楽しく学ぶ動機づけを行う。</li> <li>・興味ある人物やできごと、文化などを取り上げ調べる活動を通して、歴史学習への関心を高める。</li> <li>・歴史上の人物やできごとを、年表と関連づけて歴史の動きを大きくとらえる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校の歴史学習をふり返り、興味や関心が引かれた人物やできごと、文化などを思い出し、中学校で登場する人物やできごと、内容とどのような違いがあるか考える。</li> </ul>	小学校の歴史学習をふり返りながら、興味のある人物やできごと、文化遺産などについてカードにまとめたり、年表をつくってみる。(1時間)
<b>第1部 原始・古代</b>				
<b>第1章 文明のはじまりと日本列島</b>				
1・2章の導入 pp.10-11			世界の原始・古代の学習からスタートし、日本列島へと視線を移しながら、世界や日本でどのようなものが生み出されたか考える。	章扉(pp.10~11)の写真や地図、語句を通して「動物とともに生きる」について考えてみる。(1時間)
3	(1)木から下りたサル pp.12-13	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒は、人間の歴史はいつ始まったのか、サルからヒトへと、いつ、どのようにして変わったのかなどに興味を持ち、たくさんの疑問をもっている。第1章では、資料を手がかりに問いを立て、推理を広げ、さまざまな形で意見を出し合う学習のスタイルを作ることを大事にしたい。</li> <li>・人間とサルの違い、ヒトの進化については、既成の仮説を教え込むのではなく、生徒自身から様々な仮説を出させ、発掘結果や整合性に照らして検討するようにしたい。ラミダス猿人の発見自体が、森林がサバンナに変わったから二足歩行したという仮説を否定するものだった。</li> <li>・現生人類はアフリカで生まれ一つの種が地球に広がったこと、その後の生活の変化や文化創造は生物学的進化によるものではないことは、人間のとらえ方として大事な事実であろう。ヒトはもともと肌の色は黒く、生活環境の違いによって、さまざまな肌の色のヒトが現れたこともおもしろい(スティーヴン・オッペンハイマー『人類の足跡10万年全史』草思社、p.222)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ラミダス猿人の発掘をもとにした想像図から、なぜ二足歩行を始めたのか、それによって人類の生活はどう変わったのか考える。</li> <li>・アフリカを出た現生人類(ホモ・サピエンス)が、自然環境の違いを超えて地球上のすみずみに広がって住むようになったのは、どんな課題をクリアしてきたからか考える。</li> </ul>	
4	(2)種が落ちないムギ pp.14-15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・農耕・牧畜のはじまりは、人間の歴史において最も大きな変革であり、栽培植物は最も貴重な文化財である。これを発掘によって明らかになってきた事実、身近な事実をもとに理解したい。</li> <li>・農耕・牧畜は、世界の各地域で、それぞれの自然環境に縛られたり活かしたりして、始まり、拡がり、定着した。人間の歴史を自然とのかかわりの中でとらえる視点は、現代まで貫いていきたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人類は、長い年月かかって、野生の植物(動物)から栽培植物(家畜)をつくりだし、農耕と牧畜の生活を始めたことを理解する。</li> <li>・身近な雑草の種などに関心を持ち、米や麦、トウモロコシやバナナなどの食べ物の中に歴史を見つめられるようにする(中尾佐助「栽培植物は文化財」)。</li> </ul>	
5	(3)ピラミッドのなぞ pp.16-17	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ピラミッドやミイラなどエジプト文明については、子どもたちもいろいろなことを知っている。何のために、どのようにして建設したかもさまざまな意見を持っている。それを授業の場で楽しく出し合い、説明し合いたい。生徒の関心に合わせて、写真なども準備できる。例示した授業展開例だけではなく、多様な展開を構想したい。</li> <li>・ここでは、巨大な直方体の石を崩れないように積み上げるという点に絞った。その技術がナイル川の洪水を利用した農業から生まれたことにつながれるとよい。水槽や手作りの道具を準備するとよい。</li> <li>・国家の成立については、さまざまな仮説がある。どのように取り上げるかは、以後の授業構想によって選ぶのがよいだろう。しかし、概念の押しつけは避けたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ピラミッドのなぞを出し合い、遺跡の発掘や資料をもとに楽しく解いていく。</li> <li>・エジプト文明とナイル川のめぐみによる農業とのつながりを見つけて。豊かな実りが国家を成立させ文明を開花させたことに気づく。</li> </ul>	

6	(4) ブッダになった王子 pp.18-19	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インドの古代文明を、仏教の成立と広がり主要教材とした授業にしたい。仏教も、シャカ族の王子=ブッダに焦点を当てて、彼の歩みを追っていく形にしたい。アーリア人の進出やアショカ王など、前後の事象は、中心教材との関連で扱う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シャカ族の王子・シッダールタの歩みをたどりながら、ブッダと呼ばれるようになる経過、仏教の成立と広がりを探る。</li> </ul>	
7	(5) 地下から出てきた大軍団 pp.20-21	<ul style="list-style-type: none"> <li>・古代の中国文明を子どもが実感するためには、それを具現している歴史的事象を詳しく見ていくことが求められる。その事象として、秦始皇帝兵馬俑を中心に置き、匈奴や万里の長城でそれを補う形の授業にしていきたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・兵馬俑軍団を分析しながら、秦はその軍力で中国統一を果たし、さらに匈奴との戦い・交流により、その領域を拡大したことを把握する。</li> </ul>	
8	(6) 円形競技場の熱狂 pp.22-23	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歴史上のローマ帝国を子どもが実感するためには、帝国の成立過程や政治・社会の構造ではなく、そこで暮らす人々の姿を見ることによって可能になる。競技場で熱狂する人々、労働する・反乱を起こす奴隷、戦う兵士たち、イエスの周辺の人びとなどに焦点をあてたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そこで暮らす人びとの姿を通して、地中海地域で帝国を築いていたローマに目を向ける。</li> </ul>	
9	(7) 湖にゾウを追う pp.24-25	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1万年以上前は、日本国、日本列島は成立していない。「日本で一番古い」「世界最古」を歴史学習に求める発想は捨てたい。旧石器ねつ造事件の教訓でもある（南方系のナウマンゾウが「日本列島」地域に移動してきたのは、40万年以上前、これを追って人が来たわけではない）。教科書p.24図版4、p.26図版3、p.35図版2、p.35図版5、p.37図版5、p44図版2などを比べることで、「今のような日本」がいつどのように成り立つのか、関心を持たせたい。</li> <li>・一つの発見から研究が進展し、発掘に基づく推理の積み重ねと裏づけによって時代像が描かれていくことを、具体的に学びとらせたい（こんな発掘から、このように推定できる）。〔遺物の発見〕発掘〕出土品と遺跡〕推理〕時代像〕へと、楽しく広げる。中学生などアマチュアが発掘・発見にかかわったことも知らせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文時代よりもっと古い時代（4万年以上前）に、日本列島に人が住んでいたことを知る。</li> <li>・湯たんぼのような化石やローム層の打製石器などの発見に始まる研究によって、古い時代の歴史が、一つ一つ解き明かされてきたことに関心をもつ。</li> </ul>	
10	(8) かわる気候、めぐる季節 pp.26-27	<ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文の豊かさや厳しさ、生活の具体像と社会の変化を1時間で扱うのは難しい。1万年以上に及ぶ長い時代だったことは、まず押さえたい。</li> <li>・縄文時代は地域の個性が現れた時代（クリ・クルミ・トチの利用/サケの遡上・淡水魚・イルカ・海獣など/土器の様式）。地域の博物館と連携するなど、地域の遺跡を取り上げたい。また、東シベリアなど森林地帯の定住した採集生活に共通する特質のなかでとらえたい。</li> <li>・採集では女性が大きな役割を果たした。ジェンダーの視点は大切（歴史教育者協議会『学びあう女と男の日本史』青木書店など）。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文時代には、定住がすすみ、採集・漁・狩りと初期的な栽培の生活が行われたことを具体的に理解する。</li> <li>・人びとは季節のめぐりや自然環境などを上手に利用していた。しかし、気候変動や人口の増加などによって左右される不安定な生活でもあったことを知り、自分なりの時代像をもつ。</li> </ul>	
11	(9) 稲作がはじまる pp.28-29	<ul style="list-style-type: none"> <li>・弥生時代とは「本格的な稲作（食料生産）を基礎とする生活が始まった時代」（佐原真）とする。九州北部で灌漑稲作が始まり、本州北部まで広がる時代を地球的な気候変動、朝鮮半島や中国の状況との関わりの中で理解したい。</li> <li>・品種がそろわない雑草混じりの水田と道具から、弥生の稲作のあり方をイメージする。石包丁と鉄鎌の稲刈りと比べる作業などを取り入れたい。稲作技術は、この後の時代でも随所に取り上げている。小学校での米づくりの体験学習とつなげられるとよい。</li> <li>・クニから国へ、王が現れ、戦争が起こる過程を、遺跡や出土品から追っていききたい。国家の成立は、エジプトより丁寧を考えることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中国・朝鮮半島との交流の中で、本格的な水田稲作が始まり、生活が大きく変わったことを理解する。</li> <li>・クニができ、王が現れ、土地・水や貯えをめぐって戦争が起こるようになったことを知る。</li> </ul>	
	1章のまとめ、歴史を体験する pp.30-31		火おこしに挑戦しながら、どのような発火法があり、また火を手に入れた人類の生活がどのように変化してきたか考えてみる。	1章での学習をふり返る。火おこしに挑戦しながら、人類の生活がどのように変化してきたか考えてみる。（1時間）
<b>第2章 日本の古代国家</b>				
2章の導入 pp.32-33				章扉（pp.32～33）の写真や地図、語句を通して、世界にはどのような宗教があり、いつ、どこで生まれたかを考えてみる。（1時間）

12	(1) 倭国の女王、卑弥呼 pp.34-35	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本列島の国家形成において、中国の冊封体制、朝鮮半島との関係は極めて重要である。これを時系列で捉えることを重視するならば、教科書p.29の「クニができ、王があらわれる」に続けて、教科書p.34「漢と紀元前の東アジア」を学習するのが順当である。ここでは卑弥呼に焦点をあて、東アジアの動き全体は、年表(pp.296~297)を活用して押さえる流れにした。</li> <li>・『魏志倭人伝』の本文にあたるとともに、考古学的な裏付けにも目を向けたい。卑弥呼=邪馬台国の呪術師=「女」王だけではなく、狗奴国と戦い、外交戦略を逞しくする政治家の側面をもっていたことを重視したい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・卑弥呼はどんな女性だったか、大乱を収め、倭国王となって国々を従えることができたのは、どんな力をもっていたからか考える。</li> <li>・中国(漢・三国)に使者を送り、国家を形成していった日本列島の様子や人びとの生活を具体的に理解する。</li> </ul>
13	(2) 古墳を見上げるムラ pp.36-37	<ul style="list-style-type: none"> <li>・火山噴火の軽石の下から現れた黒井峯遺跡などの発掘の状況を手がかりに、ムラ人の視点に立って古墳時代の生活と支配を考えたい。春の田起こしをしていた人びと、降り積もる軽石を住居から除こうとした人、家財を取りに戻った人…。(歴博に模型がある)</li> <li>・定型的な前方後円墳の出現と広がり、地域の王(豪族)たちの緩やかな同盟関係の成立を示すものにとらえる。また、5世紀、大和政権が中国・朝鮮半島と関係(朝貢・同盟・戦争)して、鉄と渡来人の文化・技術の入手を確保したことにより権力を集中・強化させたが、対高句麗戦争の敗北は政権の危機でもあった(鈴木靖民編『倭国と東アジア』吉川弘文館、2002年より)。</li> <li>・地域の古墳や遺跡を取り上げ、大和などとのつながり、地域の独自性も見ていきたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3世紀中頃~6世紀、列島中央部のムラ人は田畑を耕して生活し、ムラと区切られた居館・古墳を造る王に支配されていたことがわかる。</li> <li>・大型の前方後円墳は、各地の王たちの連合ができたことを示す。鉄素材や渡来人の技術の入手を確保したことによって大和政権の力が強くなったことにつなげて考える。</li> </ul>
14	(3) 蘇我氏と二人の皇子 pp.38-39	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本列島に生活していた人々が、大陸の文化を採り入れながらどのようにして「日本」という独立した国家を形成し、独自の文化を築いていったのかを考えさせる。</li> <li>・官僚制や仏教をいち早く大陸からとり入れて権力を確立した馬子-推古-厩戸は、どのような政治を行おうとしていたのかを考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・蘇我氏と推古天皇・厩戸皇子が政治改革を実行し、新しい政治と文化をつくりあげていったことを理解する。</li> </ul>
15	(4) 大海人皇子の勝利 pp.40-41	<ul style="list-style-type: none"> <li>・白村江の戦いで敗れた倭国は、その後の防戦のための大工事で豪族や民衆を大量動員し西日本の人びとを疲弊させた。</li> <li>・壬申の乱で大海人皇子は東国の豪族たちを味方につけて勝利をおさめ、大友皇子は西国の軍の動員に失敗した。それはなぜなのかを考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東アジアの戦争の緊張関係の中で、倭国の内乱がおこり、天武天皇が中央集権的な国家を作ろうとしたことを理解する。</li> <li>・二度の戦争で民衆がその犠牲になっていることを考える。</li> </ul>
16	(5) 奈良の都 pp.42-43	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝鮮半島を統一し国力を高めていた新羅に対抗し、大帝国唐から独立した小帝国をどのように建設していったかを考えさせる。</li> <li>・中国から文字をとり入れ、律令と戸籍・計帳によって、民衆を支配しようとしていたことを考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本が中国から漢字・仏教・律令をとり入れ、中央集権国家を成立させたことを理解する。</li> <li>・律令体制の調・庸や労役により平城京が造営され、貴族の生活ができたことを理解する。</li> </ul>
17	(6) 家族と別れる防人の歌 pp.44-45	<ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文の生活などこれまでに学んだ人々の暮らしのイメージを活かし、晩秋から冬の運脚、防人の旅立ち、春の祭りに始まる稲作…疑似体験も工夫し、律令制下の農民の日々の暮らしの実感として、労役・兵役・税負担を理解したい。</li> <li>・木簡など、学校の地元と都の貴族の暮らしを結びつける資料も活用したい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人びとへの賦課が、労役と兵役が中心であることを知り、帳簿の「逃」に注目し、律令制による公民支配が、変質へと向かうことを理解する。</li> </ul>
18	(7) 金色にかがやく大仏 pp.46-47	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大仏の巨大さを実感させたいので、なぜその大きさが必要とされたのかを考えさせる。</li> <li>・藤原四子や広嗣は、白村江の敗戦以来の対外戦争を企図するが、聖武らは仏教の平和思想で戦争を回避していくことを理解させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害と国際関係の中で大仏建立をはじめとする奈良時代の文化が盛んになるが、いずれもユーラシア大陸文化の影響を強く受けて成立することを理解する。</li> </ul>
19	(8) インド洋へ、地中海へ pp.48-49	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ムハンマドやイスラム教を起点とするが、イスラム世界が通商・交易活動によって、地中海からインド洋、中国にまで広がっていくようすを見ていきたい。その広がりとの関連でさらに東アジアの変動にも目を向けたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イスラム教の成立と拡大により、首都バグダッドにはぎわった。そのにぎわいと各地との交易との関連を考える。さらにムスリムの拡大の先にある東アジアの変動にも目を向けていく。</li> </ul>
20	(9) 北で戦い、都をつくる pp.50-51	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平安京遷都後の動きを、まず東北地方の蝦夷との関連で、それを踏まえて都における朝廷の動きを摂関政治を中心に、さらに地方に目を向けて武士のおこりに至る経過を探る。このように、地方→中央→地方という連関で、政治・社会の変動を見る形にしたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝廷軍と蝦夷軍との戦い、都での摂関政治、地方の国司の動きや反乱と武士のおこりを通して、平安時代の政治・社会の変動をとらえる。</li> </ul>

22	(10) 女性作家の登場 pp.52-53	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平安時代に生きる人びとの姿を実感するために、そこで生み出された文化に焦点を当てるとき、多様な分野のものを挙げていくのではなく、女性作家が登場した文学に絞って見ていく形にしたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『源氏物語』と『枕草子』について、女性作家たちが、かな文字で描こうとしたことを探り、平安時代が生み出した文学に触れる。</li> </ul>	
	1・2章のまとめ pp.54-55			第1・2章での学習をふり返る。印象に残った人物についてスリーヒントゲームなどをつくってみる。(1時間)
<b>第2部 中世</b>				
<b>第3章 武士の世</b>				
3章の導入 pp.56-57			人びとが馬や船に乗って行き来した。武士や軍団が支配者となり、農業や交易が生活を豊かにした。どのように変化したか考える。	章扉 (pp.56~57) の写真や地図、語句を通して「世界を結ぶ交通手段」について考えてみる。(1時間)
23	(1) 交易で栄えた博多 pp.58-59	<ul style="list-style-type: none"> <li>・博多で出土した磁器を通して当時の世界のつながりを見ることができる。博多(ローカル)ー日宋貿易(ナショナル)ー中国の産業の発達(リージョナル)ーアジアの海上交易の拡大(グローバル)を一体としてとらえることができる。</li> <li>・特に、大量の物資の運搬を可能にする航海術の発達によって、アジア各地の交易による結びつきは以前の時代と比べて飛躍的に深まり、国際関係を大きく変えていった。こうした時代の動きに注目させたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遣唐使の時代の日中関係は政府間の使節の往来が中心であったが、海上交易の発展によって民間の交易が中心になったことを理解する。</li> <li>・海上交易の発展によってユーラシア大陸の東西を結ぶルートは陸上から海上に次第に比重が移っていったことを理解する。</li> <li>・海上交易の発展が日本の社会に与えた影響を知る。</li> </ul>	
24	(2) 都で、武士が戦う pp.60-61	<ul style="list-style-type: none"> <li>・武士の台頭を、院政とのかかわりでとらえる。</li> <li>・『平家物語』が作り上げた「悪役」清盛の平氏政権の先入観から脱却し、後の鎌倉幕府のモデルともなる初の武家政権としてとらえる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・武士が院政のもとで台頭することを理解する。</li> <li>・平氏がどのようにして実力を持ち、どんな政権を作ったのか理解する。</li> <li>3. 東アジア史的な視野で、清盛がめざしたものを考える。</li> </ul>	
25	(3) 荘園絵図をえがく pp.62-63	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本中世を象徴する土地制度としての荘園制が、院政や平氏政権の経済基盤となったことを認識させる。</li> <li>・荘園の絵図には何が描かれていたのか、なぜ作られたのかということを問いながら、絵図の果たした役割について考える。</li> <li>・荘園で、人びとがどんな生活をしていったのか、生き生きと想像させたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・荘園とはどんなところだったのか、絵図から読み取るとともに、そこで生きた人びとについて想像する。</li> <li>・荘園絵図を作るようになったのはなぜか考える。</li> <li>・荘園が院政や平氏政権でどのような役割を果たしたのかを考える。</li> </ul>	
26	(4) 東国に幕府をつくる pp.64-65	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1180年から始まる戦乱は、以前は「源平の内乱」と呼ばれてきた。しかし、その呼称ではこの内乱の性質を見誤る恐れがある。単なる源氏と平氏だけの戦いではなく、対立関係を見ると源氏同士の戦いや、南都の寺院勢力と平氏の戦いもあるからだ。また、平氏の滅亡で終わらず、奥州藤原氏との戦いまでを含めて考える必要がある。これらの内乱の過程を経ながら鎌倉幕府の成立を考えさせたい。</li> <li>・幕府の構造や、承久の乱以降の北条氏を中心とした幕府の体制を理解させたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平氏を滅亡させ、東国に鎌倉幕府を樹立させるまでの過程を追いながら、どのようにして幕府が誕生したのかを考えるとともに、平氏政権との比較から思考を深める。また、江戸時代の終わりまで続く武家政権のもとができたことに気づく。</li> </ul>	
27	(5) おどる聖と念仏札 pp.66-67	<ul style="list-style-type: none"> <li>・万民平等思想ともいえる一遍の教えと行動を具体的に取り上げる。女性、病氣や貧しい人びとがなぜ、一遍と行動をとみにしたか考えさせる。</li> <li>・pp.64~65とつなげ、新しい仏教が生まれた背景に大規模な内乱や、ききん、災害があったことに気づかせ、人びとが願ったものを考えさせる。</li> <li>・『平家物語』『方丈記』の内容と関連させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一遍などの教えや行動をとおし、新しい仏教の特色をとらえる。地獄絵や『平家物語』『方丈記』などと関連させ、新しい仏教が広がる社会の状況と人びとの願いについて考える。</li> </ul>	
28	(6) 市に集まる人びと pp.68-69	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市に集まるさまざまな人びとの姿を通して、鎌倉時代の地域のおよびや社会の結びつき(社会的分業)を考える。人・物を丁寧に見るところから、たくさんの意見を引き出し、関係を探ることができる(高校では中世の身分を読みとる授業がある[加藤公明実践など])。</li> <li>・古代・平城京の東市(教科書p.43)、中世後期・室町期の京都小川通り(p.112)、近世・大阪蔵屋敷(p.126)江戸室町(p.128)などと比較して、商品流通のあり方を考えるのも有効であろう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活気あふれる市のおよびから、さまざまな人びとの姿・生活を具体的に読みとる。</li> <li>・地域の結びつき、各地の荘園と都のネットワーク、中国・朝鮮半島や北方ともつながる広域の交易関係がなりたっていたことを知る。</li> </ul>	

29	(7) 地頭が村にやってきた pp.70-71	<ul style="list-style-type: none"> <li>阿豆河荘の仮名書訴状は、虐げられる村人（荘園住民）の姿だけ、地頭の暴力支配だけを示すものではない。経済的・政治的力量を高め、惣村につながる結びつきも見せていた13世紀畿内の村人の姿を読みとりたい。また、気候の冷涼化など厳しい自然の中で生き抜いた人びとの姿をとらえたい。</li> <li>仮名書き訴状は、知恵を絞れば、知識の多少にかかわらず、かなりの部分を読みとれる資料である。時間が許せば、一文字ずつ読む形にしたい。</li> <li>幕府法による判決が、地頭非法を押さえる例が多い。鎌倉幕府の性格を見直すこともできる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>村人が書いたカタカナ書き訴え状を読みとり、荘園住民の生活と闘いを具体的につかむ。</li> <li>荘園をめぐる、住民、荘園領主、地頭、幕府の関係を見直す。</li> </ul>
30	(8) 一つにつながるユーラシア pp.72-73	<ul style="list-style-type: none"> <li>モンゴル襲来そのものではなく、元軍と日本軍の戦闘前後の東アジアの状況に目を向けさせる。</li> <li>さまざまな宗教や人間を活用し、交通網を整備したモンゴル帝国のありようを学ぶことによって一つにつながるユーラシアとなるか考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>陸海をつなぐネットワークをつくったモンゴルの日本侵略のあった時期にも、幕府もクビライもなぜ交易をしていたのか考える。</li> </ul>
31	(9) 悪党の世の中 pp.74-75	<ul style="list-style-type: none"> <li>各地で悪党が活動し、南北朝が互いに対立していたことがその活動をさらに活発にさせた。南朝方についた楠木正成もその一人であった。</li> <li>そのため南北朝の内乱が長引き、内乱に参加していた武士の中には、故郷に戻れなかったり、所領を失うものも現れた。</li> <li>足利義満が南北朝の内乱を終わらせたが、悪党は室町幕府の命令に従ったか考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>南北朝内乱終結後、悪党たちは室町幕府の命令に従ったか考える。</li> </ul>
32	(10) 境界に生きる人びと pp.76-77	<ul style="list-style-type: none"> <li>倭寇と呼ばれた集団には日本列島をはじめ朝鮮半島、中国大陸各地のさまざまな人びとが加わっていた。同時に、「倭寇」というアイデンティティも持っていた。</li> <li>倭寇は、室町幕府、明、朝鮮、琉球などの国家が確立していく過程でだいにその活動地域が制限されるようになった。</li> <li>そして、明を中心とした冊封体制が東アジアで確立した。倭寇はどうしたか想像させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>明を中心とした冊封体制の下で、倭寇はどうしたか想像する。</li> </ul>
33	(11) 職人歌合の世界 pp.78-79	<ul style="list-style-type: none"> <li>室町時代に、様々な商工業が発展したようすと、座という自治的な共同組織の特色を理解させる。</li> <li>農村の生産力の向上が商工業を発展させた時代の特色を、今堀の商業座を通して考えさせる。</li> <li>農、商に従事した今堀などを例に惣村の人びとの生活について考えさせる。室町時代の社会は基底では、惣や座など民衆の共同体によって構築されていたことに気づかせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>室町時代の産業の発達と、それを生み出した座と惣の自治的、独占的な特色を具体的な資料から学ぶ。惣村の人びとの生活について考える。</li> </ul>
34	(12) 岩に刻んだ勝利 pp.80-81	<ul style="list-style-type: none"> <li>戦国時代は、武士のみならず、あらゆる階層の人びとが実力によって物事を解決しようとした時代であることを意識させる。</li> <li>人びとが、正長の土一揆という大規模な行動をとれることができるようになった背景に、一揆や前時で学習した惣村のあり様があったことを理解させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人びとが正長の土一揆のような大規模な行動をとることができるようになったのはなぜか、前時の学習もふまえて考察する。</li> </ul>
35	(13) 禅の文化、民衆の文化 pp.82-83	<ul style="list-style-type: none"> <li>惣村を基盤にした年中行事や盆おどりから、生活に密着し引き継がれている文化を具体的にとらえさせる。pp.79～81と関連をもたせる。</li> <li>禅宗を中心とした文化の特色をつかませ、今日に引き継がれていることに気づかせる。</li> <li>『御伽草紙』などで文芸の広がり理解させ、「ものぐさ太郎」から民衆の姿を考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>禅の文化と民衆の文化を具体的に学び、人びとのどのような生活や願いから文化が生まれてきたかを考える。</li> </ul>
36	(14) アジアの海をつなぐ王国 pp.84-85	<ul style="list-style-type: none"> <li>15世紀にはユーラシアの各地で海上交易が発展した。アジアでは、明の冊封体制にもとづく朝貢貿易が行われ、明が自国民の海外渡航を禁じたため（海禁）、その代わりに担う形で、新興国琉球が華人ネットワークに支えられて交易で栄えた。世界史の中で琉球王国をとらえたい。</li> <li>北方のアイヌ、日本、朝鮮、南方のシャム、マラッカなどどのように交易のネットワークがつくられていたのか、具体的につかませる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>琉球王国の交易について学ぶ。明との冊封関係、東南アジアとの交易はどういうものか。そして、ラッコの毛皮から、日本、北方のアイヌともつながる交易のネットワークを追う。</li> </ul>
	3章のまとめ pp.86-87		<p>3章で取り上げられている絵画資料に注目して、説明をつける。また、中世がどのような時代だったか自分の言葉で書く。</p>
			<p>3章での学習をふり返る。興味を持った絵画資料に注目し、中世がどのような時代だったか自分の言葉で書く。（1時間）</p>

### 第3部 近世

第4章 世界がつながる時代

4章・5章の導入 pp.88-89			海洋を通してさまざまな地域が結びつき、独自の文化が育つ。武将や百姓・町人などの新しい動きにはどのようなものがあるか考える。	章扉 (pp. 88~89) の写真や地図、語句を通して、各地が海でつながるような世界が形成され、互いにどのような影響があったか考えてみる。(1時間)
37	(1) 大西洋の東と西 pp.90-91	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中南米は日本との関係も密接ではなく、生徒にとっても具体的なイメージに乏しい地域なので、日本人の生活とも関わりのあることを知り、身近に感じられるようにする。</li> <li>・中南米とアフリカ西岸へのヨーロッパ人の進出が与えた影響を、その地域に暮らす人々の立場から見たときにどのようなものであったかを理解できるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヨーロッパ人の来航以前から、中南米とアフリカ西岸の人々が独自の文化を創り出していたことを知る。中南米とアフリカ西岸の人々がヨーロッパ人の来航によって大きな被害を受け苦しめられたこと、その犠牲の上にヨーロッパの経済発展が進められたことを理解する。</li> </ul>	
38	(2) インドに出現した船隊 pp.92-93	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ポルトガルがアジアに進出してきたのはなぜか。</li> <li>・インド洋を中心とした交易は誰がどのように行っていたか。</li> <li>・東アジアでは倭寇による国際的密貿易が行われていた。このなかでポルトガル人が参入して交易する経過を考えさせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ムスリム商人の活躍、倭寇の活躍などアジア人の活躍による重なり合いながらの交易圏を理解する。そこにポルトガル人が武力を背景に乗りこみ、参入する。このネットワークの変化を考える。</li> </ul>	
39	(3) 銀と戦国大名 pp.94-95	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本で大量の銀が産出できるようになると朝鮮や明との交易がますます盛んになった。特に生糸や絹織物を中心に産業が発達していた明では、文化も民衆へと広がりを見せた。</li> <li>・室町幕府の弱体化と相まって戦国大名が領国を支配し、産業を興す一方民衆を戦争に動員するようになった。</li> <li>・領国内での戦国大名と民衆とがどのような関係だったか考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・戦国大名は民衆のことをどう思っていたか、また民衆は戦国大名のことをどう思っていたか考える。</li> </ul>	
40	(4) 倭寇がもたらした火縄銃 pp.96-97	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヨーロッパと日本との出会いとしてとらえがちな鉄砲およびキリスト教の伝来について、当時の東アジア海域における国際情勢の視点から考えさせる。</li> <li>・鉄砲やキリスト教という個別の技術・思想の伝来としてのみではなく、それらが社会にもたらした影響・伝来後の交流のあり方について考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・16世紀後半の東アジア海域における国際情勢の変化の中に、日本への鉄砲・キリスト教の伝来とヨーロッパとの交流を位置づける。</li> </ul>	
41	(5) 町衆と信長 pp.98-99	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中世を破壊する信長の強い革新性が強調され、一般にもそれが広く受け入れられている。自らの先入観を自覚した上で、改めて信長がどのように評価できるのかを考えさせる。</li> <li>・過去の人物の評価は、時代性を反映し、時代によって変化するものであることを意識させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・信長を「革新的な人物」と評価するのは妥当なのか。近年の評価をふまえ、戦争・天下・経済・宗教といった視点から検討する。</li> </ul>	
42	(6) 秀吉と黄金の夢 pp.100-101	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全国統一という事業が達成され、戦国争乱が終焉を迎えようとする時代を、政治史だけでなく文化や民衆の視点からとらえる。</li> <li>・全国統一という華やかさを象徴するような文化面と、その裏で多くの民衆が犠牲となっていること、さらにそうした社会を人々はどのように生き抜こうとしたか、といったことに目を向けさせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・織豊期の社会について、権力者による政治の展開からだけでなく、文化と民衆の視点を対比させることで、理解を深める。</li> </ul>	
43	(7) 村に入ってきた秀吉 pp.102-103	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豊臣秀吉は、1589年から大々的に検地を実施し、大名たちの領地を統一的に把握しようとした。</li> <li>・農村では、検地帳に名前が書かれることによって耕作権が保証されたことから「起請文」を提出した。</li> <li>・同時に刀狩を通して兵農分離を推し進めたが、必ずしも農民の武装解除ではなかった。こうしたことから、農民は検地帳に名前を書いてもらうか、考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>検地と刀狩を通して秀吉、大名、農民の関係が変化したことを理解し、検地の意味を考える。</li> </ul>	
44	(8) 僧が見た朝鮮の民衆 pp.104-105	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1592年に豊臣秀吉は朝鮮への侵略を大名たちに命じた。その結果、およそ16万人の軍勢が朝鮮半島に渡った。</li> <li>・当初は漢城を含め短期間に占領したが、義兵や明の軍隊との戦いで戦線が膠着した。</li> <li>・朝鮮の民衆はもちろん、この戦争に狩り出された日本の民衆も悲惨な状況に陥り、東アジアの戦争といえるこの戦争は、さまざまな矛盾を露呈した。</li> <li>・戦争のなかで当時の人びとがどのようなことを考えていたか想像させることで、戦争の本質に迫らせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>戦争の中で朝鮮の民衆や、戦争に狩り出された日本の民衆がどうしているかを考えていたか、想像する。</li> </ul>	

45	(9) 江戸の町づくり pp.106-107	<ul style="list-style-type: none"> <li>徳川家康が豊臣秀吉から関東に領地替えを命じられ、家臣とともに江戸に移った。その頃の江戸は、茅葺きの民家が、まばらにあるだけで、平地が少なく、隅田川が海に流れ込む低湿地と遠浅の日比谷入り江が広がっていた。家康は、幕府の拠点となる江戸の町づくりに取り組んだ。江戸の町が、どのようにつくられたか（日比谷入り江の埋め立てや飲み水の確保など具体的に取あげて）家康の都市計画を考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>家康が江戸に移った頃の江戸は、どんな所であったかイメージしながら、江戸の町づくりがどのように行われたか考える。（平地が少ないために、日比谷入り江が埋め立てられたことに注目させたい。）</li> <li>埋め立てに必要な土砂はどこから運ばれてきたか、どうして埋め立て地を商業地にしたか考える（商業地は海を埋め立てた所に作られたため井戸を掘っても水には塩分が含まれ、飲み水にならないことに気づかせたい）。</li> <li>井の頭を水源とする神田川の水を飲み水とする神田上水がつくられた。これが日本最初の水道である。この飲み水が、どのように商業地に運ばれたか考える。</li> </ul>	
46	(10) どこまでつづく大名行列 pp.108-109	<ul style="list-style-type: none"> <li>江戸時代は、幕府と藩が全国を治める幕藩体制のしくみを確立したことに目を向けさせる。</li> <li>3代將軍家光は、大名を統制し監視するために、武家諸法度に参勤交代を加え義務化した。大名が法度に違反すると、幕府は厳しく処分した。囲み「大名が取りつぶされる」からとらえさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>江戸に向かう加賀藩（前田家）の大名行列から、幕府と藩との関係を考える（参勤交代・大名行列の例が身近にあれば生かす）。</li> <li>幕府と藩が全国を治めるしくみ（幕藩体制）と、武家諸法度に加えられた参勤交代の制度化との関連について考える。</li> <li>幕府は大名統制だけでなく、天皇や公家を統制したことも考える。</li> </ul>	
47	(11) 日本町が消える pp.110-111	<ul style="list-style-type: none"> <li>朱印船貿易は、東アジア海上交易に進出したヨーロッパの国々と競うほどになったが、30年ほどでアジア各地にできた日本町が消滅する。なぜ、日本町が消えたのか、幕府の外交方針の大転換であることと関連させてとらえさせる。</li> <li>江戸時代の対外関係が閉じられてしまったイメージの「鎖国」でなく、四つの口を通じて東アジアと緊密に結びついた対外関係であったことにも留意する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>オランダ船が豊後に漂着した背後に、カトリック国とプロテスタント国の対立があった。その影響を受け、幕府の外交方針が転換した結果、アジアの日本町が消えて行くことをとらえる。</li> </ul>	
48	4章のまとめ・歴史を体験する		インターネットを利用して「洛中洛外図屏風（歴博甲本）」を分析する。	4章での学習をふり返る。「洛中洛外図屏風」の一場面に注目して、分析してみる。（1時間）
<b>第5章 百姓と町人の世</b>				
<b>5章の導入 pp.114-115</b>		章扉（pp.114～115）の写真や地図、語句を通して、世界遺産として残っている各地の建築物から、その文化の特徴を考えてみる。（1時間）		
48	(1) 武士のいない村 pp.116-117	<ul style="list-style-type: none"> <li>江戸時代の村の特色は、村に住む人達が百姓身分、武士が村に住んでいないことにある。村が年貢納入を請け負える力をつけている中で、幕府や藩がどのように村を支配し、年貢をとりたてたのか、村の人々の動きに目を向けさせる。</li> <li>その際に、玄米選別（欠けた米、ゴミなどを除く）作業をするので、玄米を用意する。</li> <li>江戸時代はジェンダーとさまざまな身分によって成り立つ社会であることに気づかせ、なぜ、幕府は、いくつもの身分のものさしがある厳しい身分制をしいたのか、[身分別人口構成グラフ]をもとにグループで話し合せて考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>年貢割合の決定権は誰が持ち、領主に誰が納めるのか、具体的に理解する。</li> <li>なぜ、江戸幕府は、厳しい身分制をしいたのか[身分別の人口構成グラフ]をもとにグループで話し合う。</li> </ul>	
49	(2) 綿花と底ぬけタンゴ pp.118-119	<ul style="list-style-type: none"> <li>綿の栽培への百姓の意欲が底ぬけタンゴという道具を生み出していることに目を向けさせる。</li> <li>綿花生産が別の商品作物を生み出し、貨幣経済の浸透を促したことに気づかせる。</li> <li>木綿が衣料の他にどのような分野に影響を与えたかを考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>現金収入を得るために綿の栽培で百姓はどのような創意工夫をしたのか考える。</li> <li>また、木綿の生産により、百姓・消費者双方にどのような産業・生活面の向上があったのか考える。</li> </ul>	

50	<b>(3) 刀より金銀の力</b> pp.120-121	<ul style="list-style-type: none"> <li>・17世紀後半には、商業の発達によって、大阪に全国の商品が集まり、大阪は「天下の台所」といわれた。京都、大阪の商人は、富を蓄え、武士をしのぐ力をもつようになった。</li> <li>・京都、大阪の商人たちは、その財力をもとに、商人が担い手となる町人文化（元禄文化）を生み出した。</li> <li>・今に残る歌舞伎、俳諧、人形浄瑠璃などや節分、ひな祭り、盆踊りなどの年中行事が庶民の間に広がったことに注目させたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・京都、大阪の商人がどのようにして財力を蓄えたか考える</li> <li>・京都や大阪の商人たちが、生み出した町人文化について、今に残る文化に注目させ元禄文化の特色を考える。</li> </ul>	
51	<b>(4) 北の海から来た昆布</b> pp.122-123	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちの目を、北方のアイヌの人びとの暮らしに向けていきたい。そのために昆布採りの労働、交易の姿を具体化するとともに、その取巻を図る和人との戦いを重点化する。さらに、その昆布が日本各地へ運ばれる状況を見ながら、列島の北から南への流通のようすに気づかせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アイヌの人々の暮らし、それを脅かすものとの戦いに目を向け、昆布を例として、アイヌの人びとを起点とする流通の状況を学ぶ。</li> </ul>	
52	<b>(5) 江戸を行く朝鮮通信使</b> pp.124-125	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豊田秀吉の朝鮮侵略によって日本と朝鮮の交流が途絶えていたが、国交が回復して「通信使」が朝鮮から派遣されるようになった。</li> <li>・対馬藩の儒学者である雨森芳洲は、「誠信の交わり」を説き、新井白石との論争を通して日朝関係の確立に努めた。</li> <li>・幕府は大名や民衆に、通信使を朝鮮の朝貢使節ととらえさせるような手立てをとり、朝鮮王朝側も「中華文明」を日本に伝えて朝鮮の優位性を確保しようとした。</li> <li>・こうした意図はありながらも、通信使一行と日本の儒学者の交流は、各地に祭や人形などの形で伝えられていることの意味も合わせて考えさせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝鮮通信使が大坂から江戸までの陸路を2000人の行列をつくって進んだが、朝鮮はどうして通信使を送ったのか、幕府はなぜそれを受け入れたのか、そして民衆は通信使の行列をどのように迎えたか、考える。</li> </ul>	
53	<b>(6) 将軍吉宗のなげき</b> pp.126-127	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5代将軍綱吉の政治の頃になると、幕府の財政が行き詰まってきた。8代将軍吉宗は、新田開発を奨励し、年貢の増収をはかった。しかし、米の値段が下がり続け米以外の諸商品の値段が上がったのはなぜか考えさせる。</li> <li>・その結果、幕府財政は改善されず、家臣の俸禄も払えなくなった。その対策を考えさせる。</li> <li>・吉宗が行った目安箱等の政治改革を取りあげる。</li> <li>・財政改革は幕府だけでなく、藩でも行われた（米沢藩の財政改革にふれる）。</li> <li>・18世紀後半、老中田沼意次の財政改革の特色を取り上げる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5代将軍綱吉は、儒学を盛んにし、「生類憐れみの令」を出したことにふれる。</li> <li>・8代将軍吉宗のとき、新田開発により年貢が増収した。しかし米の値段が下がり、幕府の財政は家臣の俸禄も払えないほど悪化した。その原因と対策について考える。</li> <li>・財政の悪化は、幕府だけでなく藩も同じであった。これらの原因は、米経済から貨幣経済への変化にあることに気づく。</li> <li>・吉宗と田沼の財政改革の違いについて考える。</li> </ul>	
54	<b>(7) 裏長屋に住む棒手振</b> pp.128-129	<ul style="list-style-type: none"> <li>・18世紀ごろ、100万人の大都市江戸の町には、武士以外の町方の人々が生活していたが、多くは長屋を借りてその日稼ぎをする庶民であった。</li> <li>・天秤棒を担いだ棒手振（小商人）が中心になって江戸の町の生活を支えていた。庶民の職種の多さに注目させる。</li> <li>・裏長屋の生活の工夫と江戸に集まってきた庶民生活の基盤の弱さに気づかせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・流通が未発達な江戸の町において棒手振と呼ばれる小商人の役割と、物を持たない裏長屋での生活を具体的にイメージする。</li> <li>・江戸の町には、生業として300種以上の職種があった。そのなかで棒手振層が果たした役割について考える。</li> </ul>	
55	<b>(8) 地鳴り山鳴り、のぼりを立て</b> pp.130-131	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それまでの一揆と異なり、江戸時代における百姓一揆は犠牲者を出さずに要求を通すための工夫がなされたことを図版や本文から読み取らせる。</li> <li>・幕府や藩の財政悪化による年貢引き上げや専売制に反対する百姓一揆も増えていくことを捉えさせる。</li> <li>・百姓一揆の作法に興味・関心を持たせるとともに、ここから生まれた思想について考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・庄内藩の百姓一揆では、百姓たちの要求を通すため、幕府や藩に対して、どう対処したか考える。</li> <li>・厳しい処分に対して、百姓たちは要求を通すために、どのような工夫をしたのか、考える。</li> <li>・百姓一揆のいざちや作法について、図版から読み取る。</li> <li>・囲み「百姓一揆のなかから生まれた思想」から、考える。</li> </ul>	
56	<b>(9) 人体解剖の驚き</b> pp.132-133	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1773年、オランダの解剖書を翻訳した「解体新書」が完成。日本の科学的近代化の出発点と評価されるべきことである。いかに権威ある通説であっても疑問を持ち、確かめる必要があることを杉田玄白らは実証した。</li> <li>・人間は生物学的にも平等であること、解剖の過程で被差別民の果たした役割なども理解させたい。</li> <li>・学問や科学の発展に必要な環境や条件とは何かについても考えさせたい。</li> <li>・西洋学問の発展が、中国の医学の後進性の証明として受け取られ、短絡的に中国・アジアの蔑視へとつながるように留意する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学問の自由が制限されている幕府政治の下でも、真理を求めて新たな学問を追究した人びとがいたことを、『ターヘル・アナトミア』翻訳の仕事を通じて理解する。</li> </ul>	

57	(10) 寺子屋の子どもたち pp.134-135	<ul style="list-style-type: none"> <li>・18世紀後半になると、町でも村でも寺子屋がたくさんできた。6歳ぐらいで子どもたちが寺小屋に通い、「読み書きそろばん(計算)」を学び、読み書きが広がった。</li> <li>・藩政改革のなかで、各地に藩校がつくられた。武士の子どもたちは藩校で学んだ。</li> <li>・19世紀になると、文化の中心が上方から江戸に移り、庶民の間に歌舞伎、俳諧、長編小説などが広がった。また、伊勢参りなどの寺社参詣の旅が盛んになった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・18世紀後半には、6歳ぐらいの子どもたちが、町や村にできた寺子屋に通うようになった。子どもたちが寺子屋に通うようになった背景を考える。</li> <li>・寺子屋での学びについて、その内容や学び方、テストがあったか、師匠への謝礼など、今の学校との違いに気づかせたい。</li> <li>・数多くの藩校がつくれ、武士の子どもたちが藩校で儒学を学んだことに気づかせたい。</li> <li>・19世紀になると、文化の中心が上方から江戸に移った。町や村では文字文化が広がり庶民は、歌舞伎・俳諧・長編小説などを楽しむようになった。</li> <li>・今に残る江戸の文化に気づく。</li> </ul>	
58	(11) 毛皮を求めて東へ pp.136-137	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大黒屋光太夫のロシア漂流をもとに、当時のロシアのシベリア征服の実態とそれに伴う対日貿易の目的について考えさせる。</li> <li>・寛政の改革の内容を学ぶとともに、光太夫の帰国前後の蘭学者等のロシアに対する関心と幕府の対応に目を向けさせ、教科書pp.138-139につなげていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大黒屋光太夫の事例をもとに、ロシアのシベリア征服の実態と対日貿易の目的、同時期の江戸幕府の改革と北方地域への対応を理解し、今後の対外関係を考える。</li> </ul>	
59	(12) 外に危機、内にも悩み pp.138-139	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1780年代から、北太平洋産の毛皮貿易をめぐって、イギリス・アメリカ・フランスなどの極東への進出が始まった。それとともに諸外国が日本に関心を持ち始めた。</li> <li>・19世紀になると、アメリカ・イギリス・ロシアなどの外国船が日本沿岸に現れた。こうした動きに危機感をもった幕府は、1825年に各藩に異国船打払令を命じた。</li> <li>・欧米諸国の動きに関心を持つ武士たちからの幕政批判を恐れた幕府は、そのグループを処罰した。</li> <li>・この頃、全国的な飢饉が起こり各地で百姓一揆や打ちこわしが起こった。一方では、幕政改革や藩政の改革が行われた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・18世紀末から19世紀に日本に関心をもった諸外国が日本の沿岸に現れる。ここでは、アメリカ船モリソン号事件と異国船打払令について考える。</li> <li>・幕府の外交への批判とそのグループへの処罰について触れ、当時の世界情勢(アヘン戦争)と異国船打払令の撤回について考える。</li> <li>・この頃、全国的な飢饉がおこっている。各地に百姓一揆や打ちこわしが起こった。大阪の大塩の乱にも注目する。</li> <li>・老中水野忠邦の幕政改革(天保の改革)では、農村への人返しや庶民に奢侈禁止・儉約を命じている。この改革が失敗に終わった理由を考える。</li> </ul>	
	歴史を体験する pp.140-141		地域の博物館を訪れたり、実際に地域を歩いてどのようなものが残っているのか探してみる。	地域の歴史を探ることによって、どのような新しい発見が生まれたか記録してみる。(1時間)
	4章・5章のまとめ pp.142-143			4章・5章での学習をふり返る。「近世」がどのような時代だったか、「できごと」を中心にまとめてみる。(1時間)
<b>第4部 近代</b>				
<b>第6章 世界は近代へ</b>				
6章・7章の導入 pp.144-145			世界や日本で社会が大きく変化する。写真や印刷物から時代の変化を読みとる。	章扉(pp.144-145)の写真や地図、語句を通して、「万国博覧会」が何を象徴しているか考えてみる。(1時間)
60	(1) アメリカの大地に生きる pp.146-147	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2007年、国際連合で「先住民の権利に関する国際連合宣言」が採択された。先住民は社会や土地、固有の言葉や文化などを否定され奪われてきたという歴史的な認識のもと、先住民の広範な権利を認める画期的な宣言である。アメリカの独立を白人中心の民主主義の発展とみる歴史教育にも変化が求められる。</li> <li>・アメリカ先住民を歴史の主体として、生活と政治の特色、独立戦争にあたっての行動を知り、合衆国成立の意味を先住民の側から考えさせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アメリカ先住民の生活と白人が来たことによる変化を知る。独立戦争や合衆国の成立は、先住民から見てどのようなことだったのか考える。</li> </ul>	

61	<b>(2) パステューを攻撃せよ pp.148-149</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フランス革命がもたらした社会や政治の大きな変革の意義について考えさせる。封建制廃止や選挙権などについて具体的なイメージを持たせたい。</li> <li>・革命のなかで女性の既存の権利が奪われたことに目を向け、女性やさまざまな立場の視点で革命がどのようなできごとだったか考えさせる。</li> <li>・革命により地方にも法が貫徹され、国民国家が形成されていくことに気づかせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フランス革命がおこり、社会や政治はどう変わったか。革命のなかで、女性やさまざまな立場の人びとが何を求めたか考える。</li> </ul>	
62	<b>(3) 工場で働く子どもたち pp.150-151</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・産業革命は、手工業から工場制機械工業へと生産の方法を変えた変革であり、生産力の飛躍的な発達をもたらした。機械と発明者の名の暗記ではなく、技術の変革を具体的に理解させたい。</li> <li>・産業革命によって、生産手段を私有し利潤を追求する資本家と自らの労働力を売るしかない労働者という二つの階級が生まれ、資本主義社会が成立した。児童労働の実態から資本主義のしくみに迫りたい。また、非正規労働、ブラック企業など現在の問題とつなげて考えさせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ミュール紡績機を使う紡績工場で働くプリンコウとメアリという二人の子どもの労働者に注目し、なぜ子どもが働かされるのかを考える。子どもの労働者が集会に参加する姿を追い、人間らしい暮らしと労働条件を求めて、労働運動が行われたことを理解する。</li> </ul>	
63	<b>(4) グリム兄弟の願い pp.152-153</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現代の国民国家というものは一定の領域を持ち、同一の民族からなる平等な市民によって構成される国家だと考えられているが、それは昔から自然に存在していたのではなかった。18～19世紀にヨーロッパでどのように形成されたかを知る。</li> <li>・「民族」というものは生物学的な差異に基づくのではなく、言語や文化等の共通性を拠り所にしており、歴史的に作り出されてきたものであることに気づかせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドイツの分裂状態を克服して、民主的な統一国家を期待する動きが民衆の中に広がった理由を理解する。プロイセン王国がオーストリアとフランスの介入を排除して諸領邦を統合し、ドイツ帝国を作り出したことを知る。</li> <li>・ドイツ帝国とオーストリア帝国の支配下に置かれた異民族の間で、なぜ自治と独立の動きが広まったのかを理解する。</li> </ul>	
64	<b>(5) アヘンを持ち込むな pp.154-155</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アヘン戦争をめぐる諸事実のうち、生徒の眼をひくものはアヘンの害毒と、それに対する中国側のアヘン没収・焼却という強行策だろう。ここを授業の中心に据えたい。</li> <li>・だが、強行策はイギリスとの軍事的対決へと展開し、南京条約という結末を迎える。強行策は好ましい結果を生まなかったように見えるが、これをどのように評価したらいいのか。最後に考えさせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イギリスのアヘン大量密輸に対する中国の強行策を紹介し、戦争の展開、南京条約への経過をたどり、中国のアヘン貿易への対応を評価する。</li> </ul>	
65	<b>(6) インド大反乱と太平天国 pp.156-157</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界中に綿織物・更紗を輸出していたインドは、イギリスによる植民地化によって、その基盤を崩された。中国も、アヘン戦争ののち、欧米勢力の進出で民衆の暮らしは悪化していた。だが、インドでも中国でも、それに対する民衆の抵抗運動がおこる。植民地というシステムは矛盾をはらんだものであることを実感させたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イギリスの植民地化に対して、また、欧米勢力の進出が盛んな中国で、それに抵抗する運動はどのように起きたかに目を向け、植民地化は根本的な矛盾をはらむことに気づく。</li> </ul>	
66	<b>(7) 黒船を見に行こう pp.158-159</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・江戸湾まで押し掛けた黒船。幕府のみならず、一般庶民の興味・関心の高さにも目を向け、当時の日本人が黒船来航をどう受け止めたか、考えさせる。</li> <li>・ペリーの来訪とその背景にある欧米諸国のアジア進出に動揺する幕府、さらには幕藩体制の弱体化をつなげて考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペリーの来航が当時のさまざまな人々に与えた影響、具体的な資料、特に瓦版から想像する。</li> <li>・ペリーの来航の目的を、欧米諸国のアジア進出を背景にとらえさせ、幕府のとった対応について考える。</li> </ul>	
67	<b>(8) ドルと小判 pp.160-161</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・開港により貿易を開始するということは、どういうことか。通貨の交換に焦点を当て、考えさせる。また、横浜港や民衆の生活の様子など資料から読み取らせる。</li> <li>・開港は、民衆の生活や国内の産業さらに国内の政治にどのような影響を与えたか考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・開港による貿易が始まり、経済・社会が混乱する中で、民衆の生活がどう変わっていったか考える。</li> <li>・開港をきっかけに幕府と倒幕派、朝廷の動きがどう変化していくかに目を向ける。</li> </ul>	

68	<b>(9) 下関で、鹿児島で pp.162-163</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・開港後、攘夷運動が激しくなり、長州藩は1863年5月、関門海峡を通過するアメリカ商船やフランス軍艦などを奇襲攻撃した。</li> <li>・翌年、イギリス・フランス・アメリカ・オランダの四国連合艦隊に下関砲台が攻撃され、長州藩は攘夷戦争に敗北した。</li> <li>・イギリス艦隊は生麦事件の賠償金など要求して、1863年7月、鹿児島湾に侵入し鹿児島を攻撃した。薩摩藩はイギリス艦隊に敗北した（薩英戦争）。</li> <li>・長州藩と薩摩藩は、欧米諸国との軍事力の差を目のあたりにした。両藩は1866年に同盟を結び、攘夷から倒幕の方向に動きはじめた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長州藩はなぜ、1863年5月10日下関でアメリカ商船などを攻撃したのか、天皇の奉勅攘夷から考える。</li> <li>・それは、4カ国の艦隊による下関攻撃を招き、しかし、長州藩の攘夷戦争は敗北した。高杉晋作の西洋式の奇兵隊について考える。</li> <li>・開港後、江戸や横浜などで外国人を襲う事件が続いた（ここでは生麦事件が原因で、イギリス軍艦7隻によって鹿児島湾の町が攻撃を受け敗北した薩英戦争を取り上げる）ことを知る。</li> <li>・欧米諸国との軍事力の差を知った長州藩と薩摩藩は、坂本龍馬などの仲立ちで手を結び（薩長同盟）、倒幕の方向に動きはじめたことを知る。</li> </ul>	
69	<b>(10) 打ちよせる世直しの波 pp.164-165</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幕末の民衆は米をはじめとする物価の急上昇に苦しんでいた。生きるため、民衆たちが米の安売りを求めて起こした打ちこわしの様子を図版や本文から読み取らせる。</li> <li>・開国後、物価の上昇が続くだけでなく、幕府と長州藩との対立もあり、江戸や大阪といった大都市で打ちこわしが頻発し、拡大していった。打ちこわしや世直し一揆が強奪ではなく、民衆の正義や平等、助け合いといった思想にもとづいて行われたことを図版や本文から読み取らせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幕末の打ちこわしや世直し一揆において、民衆は自分たちの思想にもとづき、要求を通すため、直接豪農や商家に対して、実際どのような取り組みをしたのかを考える。</li> </ul>	
70	<b>(11) 政治が売り切れた pp.166-167</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1866年、第2次長州藩攻撃の敗北と各地で起こる世直し一揆や打ちこわしで、幕府の権威は衰えていた。</li> <li>・このような状況のなかで、徳川家茂は死去し徳川慶喜が将軍となる。しかし、慶喜は将軍として政治を行えないと判断し、1867年政権を朝廷に返した。</li> <li>・薩摩藩の西郷隆盛、長州藩の木戸孝允、公家の岩倉具視など倒幕派は、「王政復古の大号令」を出し、天皇を中心とした新政府をつくる。これによって江戸幕府は、滅亡した。</li> <li>・新政府軍が、慶喜の内大臣の職を辞めさせ旧幕府領を返還させることを決定すると、旧幕府軍は反発し、鳥羽・伏見で戦いが始まった。</li> <li>・民衆の新政府への期待と不満について考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1867年、慶喜は幕府の政権を朝廷に返したその背景を考える。</li> <li>・倒幕派は「王政復古の大号令」で、天皇を中心とする新政府をつくることを宣言した。これによって260年あまり続いた江戸幕府が倒れた。</li> <li>・このとき新政府は慶喜の官職を辞めさせ、旧幕府領の返還を命じた。この決定に反発した旧幕府軍と薩長の新政府軍との間に、鳥羽伏見の戦いが始まった。こうして1年以上にわたり戊辰戦争が続いた。</li> <li>・庶民は、新政府にどんな期待をしたのか、どんな不満を持ったのか、考える。</li> </ul>	
	<b>6章のまとめ・歴史を体験する pp.168-169</b>		綿から糸を紡ぐ中にも歴史がある。実際に試してどのような変化だったから考える。	6章での学習をふり返りながら、モノの変化から歴史を考えてみる。（1時間）
<b>第7章 近代国家へと歩む日本</b>				
<b>第7章の導入 pp.170-171</b>		章扉（pp.170～171）の写真や地図、語句を通して岩倉使節団が世界の何に注目したか考えてみる。（1時間）		
71	<b>(1) 大名も武士もいなくなった pp.172-173</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明治維新を、幕末から近代の天皇制国家の成立までの政治や社会の大きな変動（p.173）ととらえる。この中で成立した明治国家が、日本とアジアの人びとに何をもたらしたのかを7章全体を通して考えることを見通して準備したい。</li> <li>・廃藩置県は軍事力を背景に強行され、諸藩の連合政府から、天皇を頂点とした改革派の士族（維新官僚）が権力を握る中央集権国家へと変わる。大名が、領主の地位を手放し天皇制国家を支える華族になっていった背景を考えたい。</li> <li>・古い身分の廃止によって、国民を一つにまとめて支配する枠組みが作られ、以後の学制・徴兵制・地租改正などの前提となったこともおさえる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・廃藩置県によって、幕藩体制が最終的に解体され、中央政府が全国を支配するようになったことを理解する。幕府を倒すのに大きな役割を果たした元藩主たちが、異議を唱えることもなく、廃藩置県を受け容れたのはなぜか考える。</li> <li>・新たに士族・平民とされた人びとが、古い身分の廃止を、どのような気持ちで受け止めたのか考える。</li> </ul>	
72	<b>(2) 村に学校ができた pp.174-175</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学制発布から数年で現在とほぼ同数の小学校が全国に開学した背景としての、各地域の人びとの新しい教育に対する期待と情熱を感じさせたい。</li> <li>・学校教育や徴兵制が、国民形成に大きな役割を果たしていったことを理解させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校教育においては試験よりも道徳や兵式体操が重視され、軍隊においては方言が禁止されて軍隊用語が強制されたのはなぜかを考える。</li> </ul>	

73	<b>(3) 竹槍でちよいと突き出す pp.176-177</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・廃藩置県によって権力を集中した東京の中央政府（明治政府）は、税制改革・教育改革・兵制の改革をすすめていく。地租改正が、「富国強兵」政策をすすめる財源を生み出すとともに、農村を大きく変えたことに目を向けさせたい。</li> <li>・「御一新」の時期に民衆がいだいた願いや政治への期待をもとに、明治政府の諸改革をどう受けとめたかを考えさせたい。また、民衆の生活や意識の変化に目を向けたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地租改正によって、農民が負担する税の仕組みがどのように変わったかを理解する。反対一揆や、税率の引き下げを実現したことから、明治政府の課題を考える。</li> <li>・地租改正によって、農村と農民の生活がどのように変化していくか、予想する。</li> </ul>	
74	<b>(4) 632日、世界一周の旅 pp.178-179</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岩倉使節団は、条約改正の失敗例として学ぶことが多い。本時では2年間にわたる日本人の大航海は、アメリカ・イギリス・フランスなどの大国から学ぶだけでなく、スイス・オランダ・ベルギーなどの小国にも注目し、近代日本の進路の一つとして検討したことを学ぶ。日本の近現代史を単にその経過を理解するだけでなく自分のこと・将来につながるものとして歴史を学ぶ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岩倉使節団の航海を体験することで、明治維新期の大国主義と小国主義の二つの選択を考える。</li> </ul>	
75	<b>(5) 藪から生まれる pp.180-181</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・富岡製糸場と民間生糸結社の生産方法や思想を対比させ、最重要輸出品だった生糸の生産を向上させた人びとの姿をイメージできるようにさせたい。</li> <li>・鉄道建設をはじめ政府の政策によって、どのように時代が変化していくかとらえさせる。</li> <li>・教科書p.160「横浜の貿易港と生糸」、p.182「自由民運動が農民にも広がる」、p.204「吹雪の峠を超えて」との学習と関連させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・政府の殖産興業政策について知る。富岡製糸場と碓氷社を対比し、生産や生活の向上をめざして人びとが何を考えどう行動したかを考える。</li> </ul>	
76	<b>(6) 昔一揆、いま演説会 pp.182-183</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・板垣退助らの「民選議員設立建白書」に端を発する自由民権運動が、どのような運動で、誰が参加し、どのような活動を展開したのか考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由民権運動における演説会のような通し、どんな人たちが、何を要求した運動なのかを明らかにし、また、それに対して政府がどう対応しようとしたのかをみるところから、日本の近代化について考える。</li> </ul>	
77	<b>(7) 民衆がつくった憲法 pp.184-185</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由民権運動の中では、国会期成同盟の呼びかけに応じ、各地で多くの私擬憲法が作られた。その中でも、1968年に発見された「五日市憲法」は、嚶鳴社系の憲法案を下敷きにしつつ、国民の権利、立法権、司法権などに踏み込んだ条文を持つ憲法である。さらに、それを議論した民権結社、学芸懇談会のようなもも解明されており、この時期の民権運動を考えるのに有効な教材であろう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜ、東京の中でも現在、山峡の僻地とされるあきる野市五日市で、人権を重視し、地方自治までも視野に入れた憲法案がつけられたのか、憲法案の内容にふれつつ、自由民権運動がどのような広がりを持っていたのかを考える。</li> </ul>	
78	<b>(8) 天皇主権の憲法 pp.186-187</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・憲法制定と議会開設は、自由民権運動の成果であると同時に政府による支配体制の再編成でもあった。伊藤博文らが国民には秘密裏につくり、天皇から臣民に与える欽定憲法であり、天皇主権の憲法であったことを押さえておきたい。</li> <li>・帝国議会が開かれ、国民の政治参加への道が開かれた。中江兆民の言葉、選挙運動、議会での行動を通じて、その意義と限界を考えさせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・伊藤博文の動きを追いながら憲法制定過程を学ぶ。なぜ手本がドイツなのか。なぜ国民には秘密につくったのか。どんな内容のものだったのか。国民はどううけとめたのか。資料をもとに考える。また、開設された議会で、どんなことが問題となったのか、中江兆民の行動から考える。</li> </ul>	
79	<b>(9) 北・南を組み込み、国境を引く pp.188-189</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本は蝦夷地を北海道と改め、開拓使を置いた。そして、ロシアと条約を結んで北方の領土を確定した。</li> <li>・旧土人保護法などにより、強制的にアイヌ人の生活を日本風にさせようとした。</li> <li>・さらに、琉球処分によって琉球王国を併合し、沖縄県を置いた。</li> <li>・清とは平等な外交関係を結んだが、朝鮮に対しては不平等条約を結ぶことを強制した。</li> <li>・このような日本の姿勢について、総合的に考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アイヌ人に対する政策、琉球王国の併合、清や朝鮮との条約締結などについて、総合的に考える。</li> </ul>	
	<b>6章・7章のまとめ pp.190-191</b>			6章・7章での学習をふり返る。「近代」がどのような時代だったか、「できごと」を中心にまとめてみる。（1時間）